

— 資 料 —

2005年神戸女子短期大学主催の「訪問介護員 2 級養成
研修事業 (通学)」受講生にみる意識の変化について

黒田しづえ 森内 安子 西川 貴子 片寄眞木子
上野 和廣 平野 直美 細見 和子

On change of consciousness of the students attending a domestic
helper course in second stage offered by Kobe Women's Junior College

Sidue KURODA, Yasuko MORIUCHI, Takako NISHIKAWA,
Makiko KATAYOSE, Kazuhiro UENO,
Naomi HIRANO, Kazuko HOSOMI,

要 旨

本学主催の訪問介護員 2 級課程養成研修受講生に受講動機, 事前の知識の有無を受講前に, 受講の満足度, 受講後の自身の変化を受講後に調査した。

40名の受講生によると, 進路や就職を考えての受講が多い。事前の知識の有無に関係なく熱心に取り組んだ結果, 新しい知識や技術等を得ることが多かったと同時に日常生活において, 受講生の大多数が気持ちや行動面で高齢者にやさしい思いやりのある良い変化を自覚している。

キーワード: 介護 care, 訪問介護員 a domestic helper,
養成講座 an extension course, 兵庫県 Hyogo prefecture,
指定 (認定) authorization, 実習 practice

I はじめに

現在, わが国における少子高齢化は国民の大きな関心事である。2025年には, 国民の 3 人に 1 人が高齢者という時代が来ると予測されているが, 少子化においてはそのスピードが予測された時期よりもさらに進んでおり深刻さを増している。さらには本年2005年から国民の総数が減少に転じるという事態に至っており¹⁾, こちらも予測されたスピードを上回っているという現実が報告されている。

このような時代にあって, 介護を必要とする高齢者は年々増加しており介護を勉強してみようという動きも一般化している。本学の学生においても訪問介護員研修を受講してみたいという要望があるのではないかと考え, 学内の人材と学生の学習上のニーズが合致するのであるなら, 可能な限り良質の講義や演習を受講する機会をつくりたいと考えた。「神戸 (企県) 第52-

14号」という兵庫県の研修事業指定を受けることにより、神戸女子短期大学主催の「訪問介護員 2 級課程養成研修事業（通学）」を行うこととなった。

しかし、主催者側の考える最良の講習と受講生の満足度とは必ずしも一致するとは言えないと考え、質問紙による調査を 2 度実施することにより、受講生の日常生活における変化や達成感、満足感等を知ることが目的とした。ただし、この講習期間は 8 月 1 日から 11 月 26 日であるため、総てが終了してからの結果ではなく 9 月 30 日現在の修了に近い時期に 2 度目の調査を行っている。全員が実習も経験した段階ではあるが若干の実習が残っている者もいる。

II 調査目的

訪問介護員 2 級課程講習受講前後の受講生の日常生活における認識面、行動面の変化の有無、受講における達成感、満足感を知ることにより、講習の効果の有無、今後の課題や展望を考える。

III 調査方法

質問紙法

回答率：初回 98%

2 回 80%

調査年月日 2005 年 8 月 1 日 及び 2005 年 9 月 30 日

IV 調査対象

「兵庫県研修事業指定 神戸（企県）第 52-14 号・訪問介護員 2 級課程養成研修事業（通学）」の受講生 40 名

事前に、本調査は目的外使用を行わないこと、無記名であり個人情報外部に漏れることはないことを説明し、調査用紙に答えたくない部分については答えなくても良いことを明記の上実施した。

V 結果

1 基礎属性

対象者の所属を表 1 に示す。調査対象者は全員が女性であり、本学の学生が 92.5%，神戸女子大学の学生が 5%，他大学の学生が 2.5%であった。1 年生が 69.2%，2 年生が 28.2%，3 年生が 2.6%であり、学科別では、食物栄養学科の 1 年生が 46.2%，2 年生が 10.3%，総合生活学科の 1 年生が 23.1%，2 年生が 7.7%であり、福祉学科の学生が 2 年生 5.1%，他学科の 3 年生 2.5%であった。自宅から通った学生は 64.1%，下宿や寮からの学生は 35.9%であった。

表1 対象者の所属

所属	食栄養学科1年生	総合生活学科1年生	食栄養学科2年生	総合生活学科2年生	他大2年生	他大3年生	無記入
%	46.2	23.1	10.3	7.7	5.1	2.6	5.1

2 質問項目の結果

(1) 初回

- 1) 「今回の養成講座は、何で知りましたか（複数回答）。」という質問に、79.5%が「学校の掲示で知った」、28.2%が「学校の授業で聞いた」、5.1%が「友人から」、2.6%が「家族から聞いた」と答えていた。（表2）
- 2) 「今回の養成講座に応募しようと思った理由は何ですか（複数回答）。」という質問に、59%が「以前から興味があったから」、次に「金額が安いと思ったから」が41%、「休みが有効に使えるから」が33.3%、「学校の主催だから」が17.9%、「周囲の人が進めるから」と「その他」が12.8%の順であった。その他の中には、「就職を考えているから」が多かった。（表3）

表2 養成講座を何によって知ったか

	学校の掲示	授業で聞いた	友人から聞いた	家族から聞いた
%	79.5	28.2	5.1	2.6

表3 応募理由

応募理由	以前から興味があった	受講料が安い	休みが有効に使える	学校が主催だから	周囲の進めで	その他
%	59	41	33.3	17.9	12.8	12.8

- 3) 「養成研修の費用についてお答えください。」という質問に、「すべて親が払った」が74.4%、「自分でも払ったが、親も出資した」が12.8%、「費用はすべて自分が支払った」が10.3%であった。
- 4) 「養成研修では、何を期待していますか（複数回答）。」という質問に、「受講が就職に繋がる」が61.5%、「今後の進路を決定できるかもしれない」が53.8%、「家族のお世話がでできるようになる」が35.9%とこの3点が大多数であった。（表4）

表4 養成研修に期待すること

項目	就職に繋がる	進路の決定	家族の世話	友人を作る	先生と知り合いになる	その他
%	61.5	53.8	35.9	2.6	2.6	0

- 5) 「訪問介護員について知っている事がありますか。」という質問に、「ある」が15.4%、「少しある」が46.2%、「ない」が38.5%であった。

6)「今回開講する講座の中で、興味を持っている講座はありますか。」という質問に、「ある」が69%、「ない」は31%であった。

(2) 2回

1)「今回の養成講座では、熱意を持って臨んだと思いますか。」という質問に、「そう思う」が46.9%、「どちらかといえばそう思う」が53.1%で、合わせると100%であり、「どちらとも言えない」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」はなかった。(表5)

2)「わからないことは、質問をしたり調べたりしましたか。」という質問には、「そう思う」が12.5%、「どちらかといえばそう思う」が46.9%で、半数を超える59.4%であった。「どちらともいえない」は34.4%、「どちらかといえばそう思わない」は31%、「そう思わない」はなかった。無回答が3.1%であった。(表6)

表5 熱意を持って臨んだか

そう思う	46.9%
どちらかといえばそう思う	53.1%

表6 解らないことは質問や調べることをしたか

そう思う	12.5%
どちらかと言えばそう思う	46.9%
どちらとも言えない	34.4%
そう思わない	3.1%
無回答	3.1%

3)「新しい知識や技術など得ることが多かったと思いますか。」という質問に、「そう思う」が87.5%、「どちらかといえばそう思う」が12.5%で、合わせると100%であり、「どちらとも言えない」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」はなかった。

4)「講義科目や演習科目を総合して満足していますか。」という質問には、「そう思う」が51%、「どちらかといえばそう思う」が34%で、半数を大幅に超える85%であった。「どちらともいえない」は9%、「どちらかといえばそう思わない」は6%、「そう思わない」はなかった。(図1)

5)「実習は予想していたものでしたか。」という質問には、「そう思う」が10%、「どちらかといえばそう思う」が41%で、約半数の51%であった。「どちらともいえない」は23%、「どちらかといえばそう思わない」は10%、「そう思わない」は13%、無回答が3%であった。(図2)

図1 研修の満足度

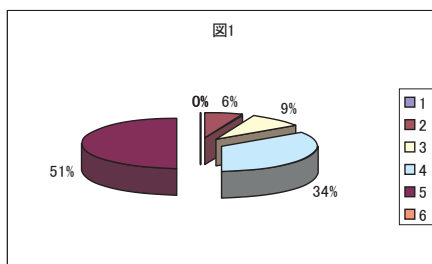
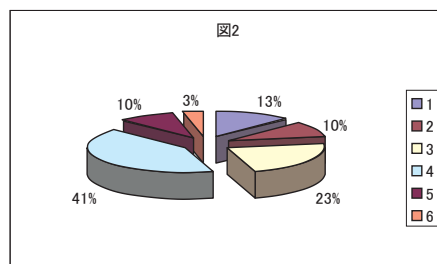


図2 実習の予想と現実との違いの有無



6)「事前に『もっと学習して置けばよかった。』と感じた科目はありましたか。」という質

問に「ある」が78%、「ない」は22%であった。(表7)

7)「本講座を受講する前と現在で、日常生活に変化がありますか。」という質問に「ある」が77.4%、「ない」は22.6%であった。(表7)

8)「本講座を受講する前と現在で、気持ちの上で変化がありますか。」という質問に「ある」が83.9%、「ない」は16.1%であった。(表7)

表7 事前学習の必要性の有無

受講前後の変化の有無

「もっと学習しておけばよかった。」科目がある	78.%	日常生活に変化がある	77.4%	気持ちの変化がある	83.9%
ない	22%	ない	22.6%	ない	16.1%

V 考察

今回の養成研修の情報を大多数の学生は学校の掲示物と授業で得ている。その結果、40人の募集に対して46人の応募があり、予想以上の関心の高さであった。

訪問介護員についての知っていることの有無を尋ねている質問で明らかのように、「ある」と明確に答えることができたのは15%程度にとどまり、興味はあるが実は余り知らないという学生がほとんどであったと考えられる。金額も他の事業所の講習費よりも安いので、今回応募してみようというところであろう。しかし、講習に対する期待ははっきりしたのがあり、「養成研修では、何を期待していますか。」という質問に、「就職に繋がる」が61.5%、「進路を決定できるかもしれない」が53.8%、「家族のお世話ができるようになる」が35.9%と、積極的に今後につなげていこうとする目的意識がうかがえる。また、「開講する講座の中で、興味を持っている講座はありますか。」という質問に、「ある」が69%、「ない」は31%であった。70%近くの受講生が興味を持って受講しようとしていることがうかがえる。

受講前のこのような積極性、明確な目的意識は受講中のあらゆる部分に現れていた。例えば、本講習は133時間というものであり、その内の61時間は講義であり、42時間は演習となっている。この他にも30時間の介護実習・訪問介護事業同行訪問実習・在宅サービス提供現場見学実習を実施することが必要である。これらすべての講義科目の10%以内において、しかも県民局が止むを得ない事情と認めた場合以外には休むことができないという学則であり、この10%に相当する6時間についても、必ず期間中に補講を行わなければならない。その上、確かに行ったという証明までもが必要となるという、大変厳しいものであった。今回は、夏休み中に行うという大前提のもとでの開講であったため、61時間の講義科目と42時間の演習はお盆休みを挟んではいたが、ほぼ途切れることなく1日に6時間から8時間という強行スケジュールで行われた。また、30時間の実習についても、短い期間内に施設や在宅の3種類に及ぶ初体験をするために、不安やストレスも大きいものであったと考えられる。主催する側としては、遅刻や早退、欠席者が出ないことや、所定の場所に確実にいけるか等を危惧していたが、1人の脱落者

を出すこともなく40名が無事に研修を終了する事ができた。つまり、補講の必要な受講生は1人も存在しなかった。講義科目・演習科目のそれぞれに達成度効果測定という試験が行われたが、全員が到達点に達することが出来た。受講生全員のこの頑張りは、平常授業時に比べて特筆に値する内容であった。

受講終了近くに行った調査では、熱意を持って懸命に努力した自己評価が現れている。その結果として、新しい知識や技術を得ることができたとする回答が100%であると同時に、「講義科目や演習科目を総合して満足していますか。」の質問に対しても、85%が「そう思う」または『どちらかと言えばそう思う』と肯定的な回答となっており、満足度としても高い評価である。今回の受講は、夏休みの貴重な経験になったものと考えられることができる。

介護現場における実習では、事前の学習の必要性を感じている受講生が78%と8割近くあり、現実の難しさや厳しさを感じた部分であると考えられる。一方で、「実習は予想していたものでしたか。」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思うが」51%であり、「どちらともいえない」は23%、「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」の実習が予想外と感じた者は合わせて23%であった。短期間に3～4種類の実習場所に行き、日替わりの介護現場での実習が予想以上に厳しい体験であったと考えられる。

一方、実習場所と受講生とのミスマッチがなかったか、距離的には妥当であったか等は、今回の調査項目には無く今後の課題である。

また、この調査項目の記述の部分の中には、身辺介護をさせてもらえず、お話や掃除のみで終了した実習への期待はずれの気持ちが書かれているものもあったが、受講生の実習が予想以上に厳しい体験であったと考えられる。今回の受講生が考える介護像が、車いす介護や食事介助のような身辺の直接介護のみを指しているとするなら、日常生活援助のプロとは何か、介護とは何かをもう一度学習する必要があると考える。つまり、日常生活援助活動には掃除・洗濯・買い物・調理・その他諸々の総てが含まれる。また、これ等の総てに人権の尊重、選択権の保障などを基本とした上で、具体的な援助の提供方法としての説明責任や観察技術等がついて回るのであるが、現在行われている2級課程養成研修の時間数では、方法論のみに陥りがちであり、今回の受講生にも免れない部分であるといえる。このことは、単に今回の受講生云々というのではなく、現行の133時間のカリキュラムでは期待される質の高い介護を行うには無理があり、限界があるということである。この点については、近い内に500時間の研修への切り替えや²⁾³⁾、それに伴うカリキュラムの見直し等が行われる予定である。

しかし、「受講する前と現在で、日常生活に変化がありますか。」という質問に「ある」が77.4%、「気持ちの上で変化がありますか。」という質問には「ある」が83.9%であった。日常生活の上でも、気持ちの面でも約80%の受講生が変化を実感しており、その内容は「お年寄りを一括りで見なくなった。」や「段差や危険物などが気にならなくなった。」などと、暖かく思いやりのあるものばかりであった。

まだ、受講したばかりであり、生活実感も乏しい受講生にとって、今回受講したことが今後の生活の中で何らかの益になることを期待したい。受講時に期待していた就職という結果が得られるか、将来の方向を決めるチャンスになるかどうかは不明であるが、目標をはっきり持つことによって一つのことを成し遂げることにつながり、総ての受講生が達成感を得ることができた。このことが、今回の養成講座の意義であるといえよう。

VI おわりに

今回の訪問介護員2級養成研修は、主催者の立場からも総てが初めてであり、そのため講師依頼や様式の異なる多くの書類の作成など、試行錯誤をしながらの実施であった。受講生の熱気、やる気に励まされて行くことが出来たといえる。受講生に様々な良い変化が現れるという効果があったことに、今回の養成研修における意義を感受している。また、介護という利用者と介護者の相互関係と同様に受講生と主催者もまたよく似た相互関係が存在していることを、再認識した。

受講生を暖かく受け入れてくださり、お教え頂いた実習施設・在宅の利用者の方々、実習指導者の方々に大変感謝している。盛夏の厳しい暑さの中を、講義・演習に御指導くださった講師の緒先生方、養成研修に多大なお力添えを頂いた三宮教育センター・神戸女子大学・本学園の関係各位に心からの謝意を捧げる。

参考文献

- 1) 平成16年 厚生労働白書 厚生労働省監修
- 2) 平成17年 介護サービス従事者の研修体系のあり方について
平成17年度 老人保健健康増進事業第二次中間まとめ
社会福祉法人 全国社会福祉協議会 中央福祉人材センター
「介護サービス従事者の研修体系のあり方に関する研究会」
- 3) 週刊 福祉新聞 第2264号 2005年9月26日記事「介護職員基礎研修実習増やし500時間に拡充」